

第2回「福井県立歴史博物館、幾久公園の基本的方向性」検討委員会 議事概要

■歴史博物館のめざす方向性

- 福井県内に恐竜博物館、こども歴史文化館等、いろいろな文化を楽しめる施設がある中、県立歴史博物館がどういった特徴を出していくか、興味がある。
- 博物館は地域博物館(第3世代)、市民との対話と連携(第4世代)を経て、共に博物館の展示を作り上げていくという市民との協働(第5世代)の時代へ移行。これにはいろいろな地域産業との協働も含む。現在、良い展示をしているが、足りないのは市民の力を活かせていない。もっと積極的に地域と共に考えていく、地域課題を考える知見がほしい。
- 歴史博物館の特徴である「文化財が非常に多分野、全時代にわたって膨大にある」点をどう活かしていくか、地域や高校生との協働に取り組むことが大切である。
- 歴史博物館のアンケートでも(付加してほしい機能として)子供が体験できる等の意見が多く、こども歴史文化館の素晴らしい展示や体験ワークショップ等の機能が、歴史博物館でも必要でないか。こども歴史文化館との連携は必要でないか。また体験型プログラムや調査をしっかりとやっていくには人材が必要であり、スタッフの共有化の観点からもこども歴史文化館と連携は必要でないか。
- こども歴史文化館は独立した博物館で、県民からの指示も高く、歴史博物館がこれきから学ぶ点は多くあると思う。施設の老朽化の観点より何らかの大きな転換を考えるのであれば、施設関係の外部の専門家を入れるなど、十分な検討が必要。
- 「収蔵しているものの本物感」や「調査研究の成果」は歴史博物館の強み。それをどう見せていくかということが大事。歴史博物館とこども歴史文化館の役割分担を無理に考えなくてもいいのではないか。
- 博物館に求められる機能は多様化しているが、それを全部やっていくのは現在の人員だと無理。思い切った人員の補充を考えるべきでないか。

■博物館の地域連携について

- 福岡県の中核博物館である九州歴史資料館で歴史好きの若者を支援していこうという取り組みがある。福井県の中核施設である福井県立歴史博物館とは、役割がとても類似している施設だと感じるので、そういった方向性について、九州歴史資料館と意見交換されてみてはどうか。
- 学芸員や市民と協働しながら、中高生向けの教育プログラムと一体になった展示、ワークショップ、体験型といったことを盛んに行っていくことが求められていると思う。

■博物館の展示やターゲットについて

- 歴史学として考えるのは小学5・6年生くらいからなので、メインの対象を中高生にすることも考えられる。それより低年齢の人には、こども歴史文化館があるので。
- 九州国立博物館では、1階の無料ゾーンに子供たちが触れて、遊んでもいい資料を置いており、上の階で父母が展示を見ている間、祖父母や子供が1階で楽しめるようにしている。福井県立歴史博物館でも人気の昭和のコーナーを1階の無料ゾーンに持ってきて、子供が遊べるようにするのもいいのではないか。
- 昭和の暮らし・平成の暮らしが無料空間のなかにありながら、いろんな親子、三世代で会話しながらそこに集えて、それが公園や歴博につながっていくというのは、世代を超えてだれもが利用するという意味で大事。
- 自然系やアート系は人気があるが、歴史系もテーマによっては、若者が歴史系の博物館に来てくれる。

■博物館の資料保存、オープン収蔵庫について

- 文化財を収蔵・保存することは歴博の大事な仕事であり、資料の散逸を止める仕事もしてほしい。ただし、

学芸員が収蔵庫に籠って出てこないのでは本末転倒。資料や歴史の研究やその発信によって、利用者が自らの生き方を考える場となるなど、その活用と共有と方法を常に考えていくという理念や明文化が重要。

- 外部の方が収蔵庫に入ることは、セキュリティや取り扱い等の面でとても難しいことではあるが、見せる方法や時間などを工夫して、何らかの形で一部をガラス窓で公開するのは、小学生にも伝わりとても意義のあること。
- 歴博の強みは収蔵しているものの本物感と調査研究の成果。文化財の保護を含めて伝えていくことは大事。
- 文化財修復の展示など、どんな風に苦労してこの展示に至っているのかということを見せていくと、もっと興味がわくため、そういうことも大事。
- 一般市民の方が裏方さんの技術に触れられるというのは、そういう体験を通じて、博物館運営に対して興味を持ち、人材育成に効果があるのではないかな。
- 高度高齢化社会は、先祖の資料を継承する年齢が高まり、資料の散逸が起こりやすくなっている。歴史博物館には受け皿としての役割を一番重視すべき。そのためには現状の2倍規模の収蔵庫が必要。

■公園の緑について

- 鎮守の森(護国神社)と両極を担う市街地屈指の森。この森をどのような形で後世に残していくかを第一に考えるべき。緑が作り出す環境を博物館と公園に導入していく。
- 外周が緑で囲われていることは、立ち寄りやすい雰囲気であり、落ち着き感が感じられる場所でもあり、表裏である。エントランス空間周辺だけでも中の様子が見えるように、植栽環境とか入口の間口、動線を見直してはどうか。
- 幾久公園は福井のセントラルパークで、あそこにいると周りの緑で遮断されて、市街地で喧騒としているが、いったん中に入るとちょっと空気や世界が変わる素晴らしい空間があって、できればあの雰囲気を残してほしい。
- 夜の10時過ぎには電灯が消えて中が危険な状態になって、気持ちのよい空間と危険な空間が隣り合わせになっている。やっぱり今の博物館部分は垣根を取っ払って、中が見えるようにできたらいいなと思うし、300mグラウンドのところは囲ってそれなりの空間を作してほしい。
- 自然と遊びのつながりがテーマとしてあり、どんぐりや昆虫採集・自然遊びなどが博物館のテーマとつながるところがあれば、内と外の一体化、体験のストーリー性が出てくるかもしれないので検討されたい。

■公園の運動施設について

- 300mグラウンドを地域の方を中心に「自由に使える」ことは大きな特徴であり、市民に非常に人気がある。多目的に使える自由な空間という発想を大事に、公園の運動施設を運営するとよいのではないかな。
- 現在のニーズに合っているのかの視点より、ゲートボール場は全国的にも利用が少ない、テニスコートは非常に人気が高いなどにより考えてほしい。
- グラウンドをスポーツに特化するのか、緑の空間の子どもの遊び場になるのか、全体が多目的な公園になるのか、方向性を考える必要がある。
- 大阪・関西万博の〈静けさの森〉とか、ニューヨークでいえばハイライン等、地元の植生を考えた公園が増えている。県内の他の場所に車で行ける運動公園があるなら、運動施設をそちらに集約するなど県内の全体像をどうするのかなどかを別途検討してほしい。

■公園の遊び場について

- 子どもの遊び空間は、自然と触れ合えるということと、保護者が見守りできる環境であることより、ゾーニングの見直しが必要でないかな。

■博物館と公園の一体化について

- 博物館と公園の一体化について、運動したり遊んだりという「動」と、博物館の「静」という、移り変わりをどう考えたらいいかを疑問に感じた。
- 博物館と公園が一体化してつながることは難しいテーマだと感じた。公園や博物館のそれぞれの場所で、それぞれの人が楽しい時間を過ごせることでいいのではないか。
- エンゼルランドのように、中でも外でもワークショップを行い、子どもたちは外で遊んで中で体験学習するというファミリーが一日過ごせる使い方が、歴史博物館、幾久公園でもできるのではないか。スポーツをしに来た人が博物館に行くような静と動のつながりが、新しい生活、ウェルビーイングを提供できるのではないか。
- ひとつの大きな公園の中にありながら、例えば運動する方々にとって博物館が離れた存在になっており、博物館に興味を持つ入口として、エントランスの景観から博物館前、公園とつながる広場の空間の使い方、景観のあり方を考え直していく余地はあるのではないか。
- 屋内外を問わず休憩スペースが足りていない。人が滞留するゾーンでスポーツをする、博物館から外に出て気分転換するなど、滞留を考えて休憩スペースつくことで新たな利用・交流が生まれる。
- さらに公園内の休憩スペース等の人が滞留する空間に、博物館を紹介する機能や仕掛けがあると、きっかけがつけられるのではないか。
- (一体化のために休憩スペースを設けることについて)温暖化で落雷も起こりやすくなっている。落雷の避難場所にもなるカフェ機能を備えたかなり大きな休憩スペースをつくり、一体化を図るのも1つの案。
- 福岡市の例で、博物館のカフェを1階にして公園側をガラス張りにし、テラス席から出入りできるようにして、公園の借景を見ながらカフェで休む利用がされている。国や県の指定文化財を扱うと、有害生物管理も考えないといけなく、カフェスペースの運用にはとても気を使うが、いろいろな工夫の仕方はあるのではないか。
- 公園と博物館を一体化する場合、年齢や家族構成などのターゲットを考えていく必要がある。
- (博物館のターゲットを中高生に特化するならば)一体化を無理にしなくても、年に1~2回イベントをして、古代体験や歴史体験のブースをいくつか出すというやり方もあるのではないか。
- 公園もカフェもどのように運営するかが課題。パーク PFI 事業、地域の人に参加できる仕組みづくりなど、地域の方が中心になって公園の管理運営に関わっていくシステムを検討していくとよい。
- 現在は垢抜けしない空間で閉鎖された空間なので、スターバックスのようなカフェが入ると面白いと思う。

■駐車場について

- 駐車場から博物館に入るには公園のエントランス空間を通らずに、建物沿いに屋根のある通路を通って博物館の入口に行ってしまう動線が主であることが、公園と博物館を二分している要因。この動線を再編されるとよい。